



Title	日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向 : 実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形
Author(s)	セーリム, パンニー
Citation	日本語・日本文化研究. 2014, 24, p. 48-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51007
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語母語話者にみる行為の結果を表す表現の使用傾向 —実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形—

パンニー・セーリム

1. はじめに

日本語には、自動詞と他動詞の使い分けがあり、日本語教育においても、自動詞と他動詞は重要な文法項目の一つとして初級の段階で導入される。

無対動詞の場合であれば、行為の結果、それが実現したか否かについて言及するとき、可能形を使用する。

- (1) レポートを書こうとしたけど、なかなか書けない。
- (2) レポート、やっと書けた。

一方、有対動詞では、行為の結果を表す際に、自動詞と他動詞の可能形のいずれも使用できる。

- (3) 黒板の字がなかなか消えない。
- (3') 黒板の字がなかなか消せない。
- (4) 新しい黒板消しを使ったら、消えた。
- (4') 新しい黒板消しを使ったら、消せた。

自動詞と他動詞の可能形のいずれを使用しても、多くの日本人には不自然に感じられないであろう。しかし、日本語学習者にとって、どのような場面にどちらの表現を使用するのが正しいのか、あるいは自然であるのかを考え、二者のいずれかを選択することは非常に難しいことである。実際、自動詞と他動詞の可能形の使い分けが明確に区別されると述べている先行研究もあり（石川 1991、楠本 2014 など）、自動詞と他動詞の可能形の関連性に関する考察はさまざまである。しかし、日本語母語話者が実際どのような場面でどのような動詞を使用しているか、詳細な調査を行っている研究は少ない。

本稿では、日本語母語話者の自動詞と他動詞の可能形の使用実態を明らかにするため、意図的な行為により、その行為が実現したか否かを示す場面（以下、「実現可能場面」とする）における、日本語母語話者の使用表現の傾向を探ることを目的とする。日常生活で遭遇する実現可能場面における母語話者の使用実態を知ることが重要であり、また、本稿での調査結果が日本語教育の分野にも貢献できるであろうと思われる。

2. 先行研究

これまで、可能表現や自動詞・他動詞に関するさまざまな研究がなされてきた。本章では、実現可能場面で用いる行為の結果の表現、とりわけ、自動詞と他動詞の可能形の双方が使用できる動詞に関する研究を概観する。

2.1 自動詞と他動詞の可能形について

実現可能場面における行為の結果の表現をする際に、自動詞を他動詞の可能形に置き換えられるという立場をとる研究には、森田 (1981・1988)、張 (1998)、庵 (2001) などがある。

森田 (1988) は、(5) (5′) を挙げ、両形式とも意思的な行為・行動を前提としているため、置き換えても表現事実に食い違いは生じないが、(5) 自動詞を使う場合は、意図的行為の結果を、(5′) 他動詞の可能形の場合は意志的行為そのものを問題としていると述べている。つまり、「シュートが決められない (意思的行為そのもの)。その結果シュートが決まらない (意図的行為の結果)」のである。

(5) なかなかシュートが決まらない。 (森田 1988 : 88)

(5′) なかなかシュートが決められない。 (森田 1988 : 88)

また、庵 (2001) は、他動詞の可能形は、動作主がある能力を持っているか否かという状態を表す表現であり意志は問題とならないことから、動作主の意志を考慮にいけない自動詞文との間に類似性が見られるとし、自動詞と他動詞の可能形が置き換えられると述べている。

これらの研究から、実現可能場面において行為の結果を表現する際に、自動詞と他動詞の可能形の双方が使えることがわかるが、日本語母語話者の使用実態を見ているわけではなく、場面によって、自動詞と他動詞の可能形のどちらの表現が自然なのか、あるいは使用傾向が高いのか、論じられていない。

2.2 日本語母語話者の使用傾向に関する調査

自動詞、他動詞の可能形の表現の使い方に関する調査は多くあるが、日本語母語話者のみを対象としたものは管見の限り見当たらない。自動詞、他動詞の可能形の表現の使い方に関する調査は小林 (1996)、楊 (2007)、王 (2012)、関 (2012)、セーリム (2013) などがある。調査目的はどれも日本語学習者と比較するためである。以下の表は各先行研究の調査概要と結果をまとめたものである。

表1 各先行研究の調査概要と結果

先行研究	対象人数	調査方法	調査結果
小林 (1996)	15人	<ul style="list-style-type: none"> 方式: 空欄補充問題 形式: 談話の場面 内容: 行為の結果 動詞: 1組(開く/開ける) 設問数: 4問 	<ul style="list-style-type: none"> 問題の1~3(実現不可能の場合)はアク、アケラレル系(自動詞、他動詞の可能形)のいずれも適切な表現である。しかし問題4(実現可能の場合)は日本語母語話者による調査でも100%の人がアク系(自動詞)であった。 母語話者はアク系(自動詞)を一番好んだ。 日本語では、行為の結果を表現する場合には、人為が加えられていることがわかっているにもかかわらず、相対自動詞が好まれて使われる傾向がある。
楊 (2007)	20人	<ul style="list-style-type: none"> 方式: 空欄補充問題(穴埋め問題) 形式: 単文+イラスト 内容: 可能の意味を持つ自動詞文 動詞: 12組以上(自由記入) 設問数: 12問 	<ul style="list-style-type: none"> 日本語話者の92%は自動詞を答えた。
王 (2012)	78人	<ul style="list-style-type: none"> 方式: 選択問題(6肢) 形式: 単文 内容: 能力2問・属性3問・結果5問・条件10問 動詞: 19組 設問数: 20問 	<ul style="list-style-type: none"> 動作性の高い文は母語話者が「られる」を多く使う。 動作性の低い文は、状態性がより強調され、母語話者が無標可能表現を使う。
関 (2012)	20人	<ul style="list-style-type: none"> 方式: 選択問題(4肢) 形式: 単文 内容: 可能表現否定形 動詞: 1組(開く/開ける) 設問数: 6問 	<ul style="list-style-type: none"> 原因が動作主にあり、ドアを開ける動作を実現できない場合は、全員が「あけられない」と答えており、他動詞可能表現が自然な表現である。 原因が主体のドア自体にある場合は、「ドアが開かない」(自動詞表現)と「ドアが開けられない」(他動詞可能表現)と答えており、どちらも自然な表現である。
セーリム (2013)	20人	<ul style="list-style-type: none"> 方式: 空欄補充問題 形式: 単文 内容: 行為の結果の状態 動詞: 8組 設問数: 10問 	<ul style="list-style-type: none"> 全体的な使用は、自動詞が用いられる傾向が高い。 設問別の使用は、自動詞の回答が多い場合も他動詞の可能形の回答が多い場合もある。

表1からわかるように、楊(2007)、王(2012)、セーリム(2013)の調査では、日本語学習者の可能の意味を持つ自動詞文(無標可能文)の習得・誤用を分析するために、可能の意

味を持つ自動詞文（無標可能文）を中心に調査を行っている。しかし、実際の母語話者の使用傾向を把握するよりもわざと自動詞の回答が出やすい文を設定しており、自動詞文の使用率が高くなるのは、当然の結果となる。また、王（2012）、関（2012）、セーリム（2013）の調査では、設問が単文で示されており、コミュニケーション上の場面、発話時が限定されておらず、結果可能文や属性可能文なども混在している。そのため、色々な意味の解釈ができる場合があり、設問によって自動詞の回答が高かったり他動詞可能形の回答が高かったりと、分析すべき傾向が見られなくなる可能性が生じる。普段遭遇する実現可能場面は、話者（行為者）だけではなく、二人以上の会話場面で起こることが多いため、アンケート調査で設ける場面は、話者（行為者）と相手との会話形式にし、より状況が分かりやすくなるように設定するべきであろう。

一方、小林（1996）では、日本語学習者の可能の意味を持つ自動詞文（無標可能文）ではなく、行為の結果を表す場面における自動詞他動詞の習得を見るために、調査を実施した。行為の結果を表わす場面の設定は明確であるが、動詞数、問題数、被調査者数が少ないため、結果を一般化しがたいように思う。

従って、本調査では、行為を行った結果、それが実現したか、あるいは実現しなかったか、という場面に絞り、採用する動詞、状況設定、被調査者数を増やし、日本語母語話者の自動詞と他動詞の可能形の使用実態を調査することとする。

3. 研究方法

本稿では、実現可能場面における日本語母語話者の自動詞と他動詞の可能形の使用実態を明らかにするために、調査を行う。

3.1 調査目的

本調査の目的は以下の二点である。

- 1) 日本語母語話者が普段遭遇する実現可能場面において、どのような動詞を使用しているかを明らかにする。
- 2) 各場面における実現可能文使用の傾向を探り、日本語母語話者が動詞を選択して使用する際の視点の置き方や考え方を考察する。

3.2 調査対象

調査期間は2014年7月～8月であり、日本語母語話者50人（以下、JNS）を対象に調査を実施した。JNSは関西の大学に通う大学生・大学院生であり、男性19人、女性31人である。年齢は10代後半～30代前半、平均年齢は21.6歳である。

3.3 調査内容

本調査は、JNS が実現可能場面で行為の結果を表現する際に、どのような表現を用い、且つ一般的にどの表現が適切であるかを調べるために、行為を実現しようとしている場面を10 場面取り上げる。各場面を行為者と相手の会話形式とし、行為者が意図的に行為をしようとしたが実現できず、相手からアドバイスももらってもう一度試みた結果、行為が実現した、という場面を設定する。調査用紙で取り扱う動詞は有対動詞 10 組であり、各場面で、行為が実現しなかった場合と実現した場合を設けているため、全部で20 問となる。

解答欄には動詞の語幹を、その後ろに、実現できない場合は「～ない」、実現できた場合は「～た」を提示し、JNS に動詞の形を自由に書き込んでもらうことにする。また、使用可能な表現が二つ以上ある場合は、最も頻繁に使用する表現を書いてもらう。さらに、場面を想像しやすくするために、調査用紙に状況説明とイラストも載せる。

なお、このテスト形式を採用する理由は、主要な回答がある程度明確に現れ、回答への負担が比較的少ないと考えられるためである。

以下に、調査で設定した場面と動詞を示す。(図1、表2)

図1 設問例

【場面1】 田中さんは、ジャムの瓶の蓋を開けようとしています。

田中：ウッ！

木村：どうしたの？

田中：ジャムの蓋、開 _____ ない。

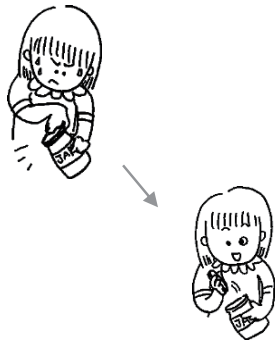
木村：蓋に輪ゴムをはめてみたら？

田中：そうだね。やってみる。

.....

木村：どう？

田中：あ、開 _____ た。ありがとう。



The illustration shows a girl on the left holding a jar with a rubber band around the lid, looking frustrated. An arrow points to a girl on the right who has successfully opened the jar and is smiling.

表 2 場面と動詞一覧

場面	場面の内容	問	実現不可能・可能	自動詞	他動詞の可能形
場面 1	ジャムの蓋を開けようとしている	問 1	実現不可能	開かない	開けられない
		問 2	実現可能	開いた	開けられた
場面 2	キーを回そうとしている	問 3	実現不可能	回らない	回せない
		問 4	実現可能	回った	回せた
場面 3	コンタクトを入れようとしている	問 5	実現不可能	入らない	入れられない
		問 6	実現可能	入った	入れられた
場面 4	字を消そうとしている	問 7	実現不可能	消えない	消せない
		問 8	実現可能	消えた	消せた
場面 5	車の後ろの扉を閉めようとしている	問 9	実現不可能	閉まらない	閉められない
		問 10	実現可能	閉まった	閉められた
場面 6	歯磨き粉を出そうとしている	問 11	実現不可能	出ない	出せない
		問 12	実現可能	出た	出せた
場面 7	ブラインドを上げようとしている	問 13	実現不可能	上がらない	上げられない
		問 14	実現可能	上がった	上げられた
場面 8	指輪を外そうとしている	問 15	実現不可能	外れない	外せない
		問 16	実現可能	外れた	外せた
場面 9	マッチをつけようとしている	問 17	実現不可能	つかない	つけられない
		問 18	実現可能	ついた	つけられた
場面 10	糸を通そうとしている	問 19	実現不可能	通らない	通せない
		問 20	実現可能	通った	通せた

3.4 分析方法

本調査の分析対象としては、各設問において JNS が使用した動詞の回答部分のみを扱う。JNS が使用した動詞を、「自動詞」、「他動詞の可能形」の二種類に分類し、それぞれの動詞の種類別の回答の割合や、設問ごとの割合をみる。また、JNS 30 人¹にフォローアップインタビューを行い、各場面における動詞選択の理由を考察する。

4. 調査結果

本章では、実現可能場面における自動詞と他動詞の可能形の使用傾向を分析する。

4.1 実現可能場面全体にみる自動詞・他動詞の可能形の使用傾向

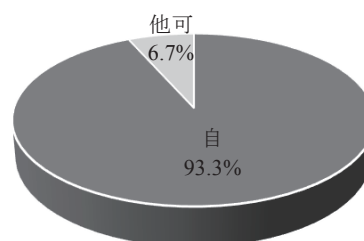
まず、実現可能場面全体における自動詞と他動詞の可能形の使い分けの傾向を見るために、JNSの回答を分析した。その結果が表3、図2である。この表と図は、各場面でJNSが回答した動詞部分を「自動詞」と「他動詞の可能形」に分類し、全設問を合わせた各動詞の使用の割合を示したものである²。JNS一人当たりの設問数が20であるため、JNS50人の回答件数は合計1000となる。

全体1000件のうち「自動詞」が933件(93.3%)、「他動詞の可能形」がわずか67件(6.7%)であった。自動詞の使用が他動詞の可能形を圧倒的に上回っていることが結果から明らかになった。

表3 実現可能場面全体にみる回答

動詞の種類	回答件数	回答割合
自動詞	933	93.3%
他動詞の可能形	67	6.7%
合計	1,000	100.0%

図2 実現可能場面全体にみる回答割合



4.2 実現不可能の場面と実現可能の場面にみる自動詞・他動詞の可能形の使用傾向

次に、実現不可能と実現可能の場合の表現を見ていきたい。

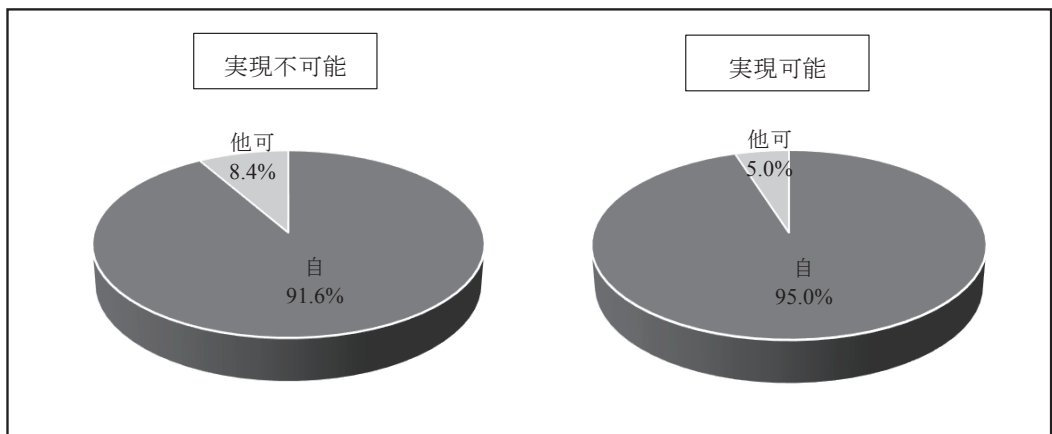
実現不可能の場合、「自動詞」が458件(91.6%)、「他動詞の可能形」が42件(8.4%)であった。一方、実現可能の場合、「自動詞」が475件(95.0%)、「他動詞の可能形」が25件(5.0%)であった。(表4、図3)

4.1で見られた結果と同じように、実現不可能の場合と実現可能の場合の双方において、自動詞の回答が高い傾向にある。また、他動詞の可能形の使用については、実現不可能の場面での使用率のほうが実現可能の場面よりやや高いことが分かった。

表 4 実現不可能と実現可能の場面にみる回答

動詞の種類	実現不可能		実現可能	
	回答件数	回答割合	回答件数	回答割合
自動詞	458	91.6%	475	95.0%
他動詞の可能形	42	8.4%	25	5.0%
合計	500	100.0%	500	100.0%

図 3 実現不可能と実現可能の場面にみる回答割合



4.3 場面別にみる自動詞・他動詞の可能形の使用傾向

本節では、場面別の結果を分析する。

分析結果は図 4 の通りであり、場面によって割合が若干違うことが分かった。場面 3 (コ
ンタクトを入れようとしている) では、他動詞の可能形の回答が見られなかった。また、場
面 1 (ジャムの蓋を開けようとしている)、場面 2 (キーを回そうとしている)、場面 5 (車
の後ろの扉を閉めようとしている)、場面 6 (歯磨き粉を出そうとしている)、場面 7 (ブラ
インドを上げようとしている)、場面 9 (マッチをつけようとしている)、場面 10 (糸を通そ
うとしている) では、他動詞の可能形の回答が 10 件 (10%) 以下と少なかった。

一方、場面 4 (字を消そうとしている)、場面 8 (指輪を外そうとしている) における他動
詞の可能形の使用は、他の場面と比べると、多く見られた。

さらに図 5 では、場面別の割合を実現不可能の場合と実現可能の場合に分けている。先に
見た場面 4、8 の他動詞の可能形の使用率の高さに関して、図 5 から、実現不可能の場面で
他動詞の可能形が多く使用されていることが分かった。

図4 場面別にみる回答

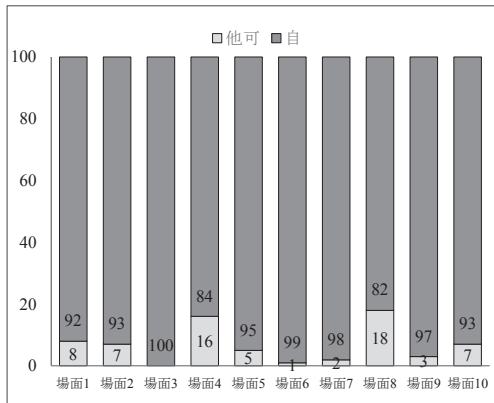
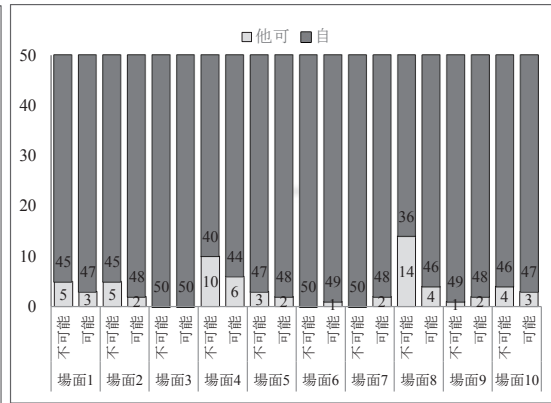


図5 実現不可能の場合と実現可能の場合の回答



4.1 と 4.2 と 4.3 の結果から分かるように、日本語母語話者に実現可能場面で使用する行為の結果を調査したところ、全体的にも、場面別にも、実現したか否かに関わらず、自動詞の使用が他動詞の可能形より高い傾向にあるということがわかった。そのため、日本語では実現可能場面における行為の結果を表す表現は自動詞文がよく使われると言えるであろう。

5. 考察

4章で示した調査結果から動詞選択の理由についてフォローアップインタビューでわかったことを考察する。JNS がそれぞれの動詞を用いた理由には、動詞の形態の違いや視点の置き方が関係しているようである。本章では、まず、動詞の形態的な原因を、続いて、日本語母語話者の視点の順に考察する。

5.1 動詞の形態の違い

他動詞の可能形を回答しなかった理由を JNS に聞いたところ、動詞の形態による原因があるということがわかった。「開ける、入れる、閉める、上げる、つける」(場面1、場面3、場面5、場面7、場面9)のようなⅡグループ動詞(下二段活用の動詞)は、可能表現にする際に、助動詞「～られる」を用いる。助動詞「～られる」を用いた表現は長く言いにくいいため、他動詞の可能形をあまり使わないとのことである。また、今回の調査では、他動詞の可能形を回答した人のうち、ラ抜き言葉を書いた人も多く見られた。例えば、開けられない→開けれない、閉められない→閉めれない、上げられない→あげれない、つけられない→つけれない、開けられた→開けた、閉められた→閉めた、上げられた→あげた、つけられた→つけた。

一方、「消す、通す」などのようなⅠグループ動詞(五段活用の動詞)の場合、可能の言いは助動詞「られる」を用いずに「消せる」「外せる」と下二段活用の可能動詞を用いる。

そのため、前者の動詞のグループより他動詞の可能形の使用傾向がやや高い（場面 4 と場面 8）。ただし、「回す、出す、通す」（場面 2、場面 6、場面 10）の他動詞の可能形の回答は前者の動詞（～られる）とさほど変わらない。

従って、動詞の形態の違いは、他動詞の可能形をあまり使用しない理由の一つとも考えられる。

5.2 日本語母語話者の視点

他動詞の可能形を回答しなかった理由として、発話時に、人ともものどちらに視点を置いているかということも関係しているようである。自動詞を回答した人は、その動作を受けた物の変化や結果などの「物の視点」に注目する。つまり、単なるその物の状態を表しているということである。一方、他動詞の可能形を回答した人は、人の力、努力、責任など（力が及ばない、努力が足りない、自分にも原因があるなど）の理由で人及びその動作などの「人の視点」に注目する。本調査では、自動詞の回答が多かったが、小林（1996）が指摘しているように、日本語では行為の結果を表現する場合には、かなり人為が加えられていることがわかっていても、有対自動詞が好まれて使われる傾向があると言えよう。また、この結果から、まさに寺村（1976）、池上（1981）、吉川（1995）などが指摘しているように日本語はナル言語の傾向であることがわかる。

6. おわりに

本稿では、母語話者が実現可能場面でどの表現を使うか、使用を明らかにすることを目的として調査を行った。日本語では、実現可能場面である行為が実現したか否かを表現する際に、自動詞と他動詞の可能形の双方が使用できるが、自動詞を使用する傾向が高いということが分かった。つまり、状態の変化した結果として、ものに重点を置いて表現しており、日本語がナル言語であることとも関係しているであろう。

今後、同じ場面における日本語学習者の使用傾向や動詞を選択する際の発想を調べ、日本語母語話者との比較を行い、日本語教育の分野に反映させていきたい。

注

- ¹ 本調査では JNS 全員にフォローアップインタビューする予定だったが、50 人のうち協力を得られたのは 30 人であった。
- ² 今回の調査では、他動詞の可能形を回答した人のうち、ラ抜き言葉を書いた人も見られた。例えば、「開けられない→開けれない、閉められない→閉めれない、上げられない→あげれなない、つけられない→つけれなない、開けられた→開けれた、閉められた→閉めれた、上げられた→あげれた、つけられた→つけれた」。これらは、他動詞の可能形として数えることにした。また、場面 2「回んない」、場面 6「出てこない、出てきた」、場面 7「上がんない」の回答は自動詞として数えることにした。

<参考文献>

- 庵功雄他(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワークワーク
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 石川守(1991)「自動詞と他動詞の用法について—「人の視点」と「物の視点」に関して—」『語学研究』第64号 拓殖大学 pp.35-80
- 王恰韓(2012)「中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究—この役はあの新人俳優にはつとまらない—」『日本語研究』32号 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1-14
- 関承(2012)「中国語を母語とする日本語学習者における可能表現否定形の正用と誤用について—「開かない」と「開けられない」を例に—」『北研学刊』第8号 白帝社 pp.91-100
- 楠本徹也(2014)「有対自動詞可能構文における意味的組成関係—他動詞有標可能構文との比較において—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40号 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.103-111
- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」『文藝語研究 言語篇』29号 筑波大学文藝・言語学系 pp.41-56
- セーリム, パンニー(2013)「タイ語を母語とする日本語学習者の「自動詞の可能形」の誤用に関する研究」大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻修士論文
- 張威(1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版
- 寺村秀夫(1976)「「ナル」表現と「スル」表現—日英「態」表現の比較—」『日本語と日本語教育—文字・表現篇—』(国語シリーズ別冊4) 国立国語研究所 pp.49-68
- 森田良行(1981)『日本語の発想』冬樹社
- 森田良行(1988)『日本語の類意表現』創拓社
- 楊彩虹(2007)「可能の意味を持つ日本語自動詞の習得—中国語話者と韓国語話者を比較して—」『言語と文化』創刊号 京都外国語大学大学院外国語学研究科 pp.51-71
- 吉川千鶴子(1995)『日英比較 動詞の文法—発想の違いから見た日本語と英語の構造—』くろしお出版